

その後、母は保育園の主任保育を二年つとめ、三年目に小学校に復職できた。人見氏は高校卒業後、小学校の代用教員を四年ばかり勤めたあと、教育大学の音楽科に進み、小さいときから好きだった音楽を学び、卒業後は中学校の音楽教師となった。

人見氏の母子共々、哀話の陰に限りなき情愛の絆の尊さを知る。

(引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

内モンゴ自治区張家口よりの引揚げ

大阪府 畑野 憲次

昭和十二年四月、茨城県笠間稲荷で有名な水戸線の笠間駅構内の鉄道宿舎で生まれた私は、水戸鉄道管理局保線区に勤務する父と母、それに三歳年上の兄との四人家族の一員となりました。

明治四十年生まれの父の生家は、東京の大井町で零

細な印刷屋を営んでいましたが、九人兄弟の子沢山の家庭では、御多分に漏れず貧乏暮らし、子供のころから家の仕事の手伝い、使い走りを余儀なくさせられ、学校も中学は夜間へ進み、苦学した父はやがて当時の鉄道省(国鉄)に入り、東京鉄道管理局保線区を振り出しに、水戸管理局の土浦へ転勤、父は二十六歳の時にここで新所帯を持ったそうです。

翌年、父は、水戸に転勤し、そこで長男が誕生、三年後には私が誕生、しかし、実家は相変わらずの薄い印刷屋、このままではという思いが募り、当時のだれもが目指した大陸での飛躍を決心し軍属となり、昭和十三年、勇躍単身にて支那へと渡りました。

雌伏二年、華北交通に働き場所を得て、やっと生活も安定し家族を呼び寄せることができたのは、昭和十五年のことでした。このとき、父が故国に残したものの、それは念願の墓所でした。大金をはたいて当時としては立派な墓を建て、私の誕生の前年に亡くなった祖父の法要を果たし、心おきなくこれからの生活の拠点、支那への長い旅の準備の緒についたのでした。

昭和十五年、笠間まで私たち母子を迎えに戻ってきた父は、大井町の実家で親兄弟妹との永の別れの宴の後、祖母、叔父、叔母を伴い、山口県の川棚温泉で故国最後の夜を過ごした。

翌日祖母たちに見送られ、下関から「関釜連絡船」に乗り、まずは朝鮮へと旅立ちました。京城には母の兄がおり、ここに立ち寄り二泊し、いよいよ内蒙古へと汽車で向かいました。万里の長城の初まり山海関で、日本円と中国円とを交換（列車内での交換）、天津、北京をも通り過ぎ、父の赴任地である石仏で名高い大同の先の支那の豊鎮に落ち着きました。

ここには、既に父の身の回りの世話をする住み込みの「次郎」と父が名付けた中国少年がおり、にこやかな明るい丸顔のこの少年を一時、兄貴と錯覚していたほど日本人に似ていて、手があいた時には、必ず私たち兄弟の良き遊び相手になってくれました。父が単身でも不自由なく暮らすことができたのは実に、この次郎少年が炊事、洗濯、風呂、掃除、買物などもこなしてくれただけにほかなりません。実に素早く、うまく

機転を利かしてくれたそうです。酒の苦手だった父に酒の席がある場合には、酔った父を迎えに店の前で待ち、連れ帰ってくれたそうです。父は中国少年と言えども差別なく、同胞部下の人たちと同じように過ごしていたのでした。徐州で雇って以来、どこまでも父を慕って付いてきたそうです。「こんな優しい主人は、ほかにはいない！」と言って。

鉄道官舎の隣には、日本軍の兵舎があり、毎晩のようによく遊んでくれたものでした。きつと、我が家で故国の匂いをかいでみたものでしょう。母も喜んで迎えておりました。生活必需物資は毎週一回、配給列車と称して貨物列車が懐かしい故国の品々を満載して運んでくれました。母の楽しみの一つはこの配給列車でした。そこには故国の香りが山盛りいっぱいにあつたのです。

やがて父は北京へ転勤となり、私たち一家は北京市内、紫禁城（故宮）の西方の大きな社宅（一軒家）に住むことになりました。

北京では昭和十八年に妹が生まれ、直後の三月、父は張家口に転勤になりました。父は軍属ですから、

時々訓練のため兵団に出掛けます。そんな折には母は白慢のドーナツを山盛りに作り、父に持参してもらうのです。お国のために頑張っている兵隊さんに食べていただくとうと一生懸命の母は、私たちが手を出そうとすると「これはダメです！兵隊さんに食べていただくのですから、あなたたちは手を付いたらいけません！」と、それはそれは怖い顔をするので、思わず手を引っこめてしまう。ふだんは優しい母だけにこたえました。

一兄は張家口第二国民学校三年に転入しました。いつも兄にくっついて遊んでいた私は兄の下校が待ち遠しくてなりません。兄と一緒に家の前の東太平山に登り、鬼キリギリスという物凄く大きな昆虫を捕りに行くのです。鳴き声もバカでかく物置に数十匹を入れておくと、戸を開けたときの鳴き声は、「ワーン」と耳をつんざくほどでした。また野兎の逃げ足の速さに呆れたり、アザミがそこいら中にいっぱい咲き乱れ、ヒマ

の実も実り、道端ではフンコロガシが動く方をじっと観察したりしていました。

昭和十九年四月、私は張家口第二国民学校に入学、吉岡春夫先生のクラスとなりました。家の北側の窓からは集団登校する私たちの姿が学校の正門に入るまで見え、毎朝、母は家の中からじっと見送ってくれました。冬には市中を流れる清水川（清河）は分厚く結氷し、子供たちはスケート遊びに興じ、大人たちは氷に穴をあけてもっぱら魚釣りの太公望となっていました。

昭和十九年九月には弟が生まれ、我が家は七人の所帯になりました。と言うのも前年に母方の祖母が、末娘の母かわいさと、孫の私たちを見たさに日本を飛び出したという連絡があり、父が山海関まで迎えに行くのと、車中換金のどさくさにだまされかかった祖母を間一髪発見、難を逃れたという一件を盛り込みながら、我が家の一員となり孫の世話に大活躍。その後、ほとんど我が家で過ごした祖母は、天寿を全うしました。

元日は森正之校長先生の訓話を、凍てつく校庭で寒さでの震えを我慢して聞き、終われば遥か離れた蒙疆

神社まで徒步行進し参拝、きびすを返して清水川中洲に建立されている北白川宮殿下の記念碑にお詣りして行事は終了。戦争中だというのに張家口はそれを感じさせないのかきさで、そしてこれ以上は言うことない！というぐらゐ裕福な毎日でした。

戦争も激しくなつてくると、学校では校庭の周囲に非常用の芋を植えたり、防空壕を掘り、その土運びをしたりすることも学校の日課に取り入れられました。校舎は既に兵舎として使用されており、低学年の私たちは登校せず自宅待機となり、四年生以上は兵隊さんの手伝いをするため登校しており、兄がうらやましく思えたものでした。

昭和二十年八月十五日終戦。国民学校の校庭に集まった私たちは、聞き取り難い詔勅を分からないままに聞き、家路につききました。家には知り合いの、根本の小母さん[〃]が来ていて、母の膝にすがりつき「悔しい！日本が負けたのよ」と泣いて悔しがっていました。父はこの日、「死ぬ時は家族一緒」と全員を神棚の下に集め、死の意味を知らぬ子供たちも一緒に目をつぶ

り手を合わせました。

張家口では戦争が終わってからまた戦争の匂いがし始め、八月十七日には家の外で何気なく中国人街の方向を見ていると、突然飛来した飛行機が爆弾を落としました。このとき、母が「家に入りなさい！」と呼び戻しに来た。家に入ると、この時も、父は家族全員を神棚の下に集め、死を覚悟の正座をしており、私も慌てて正座しました。

やがて「張家口には日本人は残留せず、全員帰国せよ！」ということが伝わってきました。鉄道員の父たちには、ほかより早く情報が入っていたのです。戦争には負けなければ、民間人は残留して今までどおりの生活が続けられる……という情報もあっただけに、このことは父にとつては、とても我慢のならないことでした。これが十九日の情報でしたから、それからが大変な騒ぎとなりました。トラックがくるというので、貴重品や高価な品々、夜具を布団袋に入れたり、洋服や着物、更にはスケート靴のエッジを外して革靴として持ち帰ろう（新品）、とにかく営々辛苦、親元に仕

送りしながらこのさきやかではあるが、自分の手で築き上げた全財産を持てるだけ故国に持ち帰ろうと、親たちは必死に徹夜で荷造りをしたのです。私たち子供は疲れて荷物の間に転がって先に寝入ってしまいました。

二十日の朝が明きました。トラックのくるのが待ち遠しくて家の前に代わる代わる迎えにでるのですが、一向にくる気配がありません。随分たつてから「トラックはこない、代わりに大八車がくる」ということになった。またしばらく時が流れた。次の情報は「大八車もこない！」ことが伝わり、追い打ちをかけるように「直ちに歩いて張家口駅に集まれ！」となった。今更荷ほどきするには時間が足りない。仕方なく残しているかと思ひ、そこらに放り出しておいた不用品を手当たり次第リュックサックや鞆に詰め込み始めました。この時になって父は「俺は日本には帰らない。ここに残り社宅を守り、せつかく築き上げた財産を守る！」と言ひだし、「一緒に帰りましょう」と家族が説得しても頑としてきかないのです。ご近所の方や組

長さんが説得にきて、「隣組の皆が揃って駅に行くことになってるから、どうか一緒に帰ろう！」と言つても答えは同じ。何度説得しても父は「帰らない、守る」の一点張り。出発の時刻は迫るし、隣組の皆さんに迷惑を掛けてはいけないと母は考え、「これで父とは今生の別れ、今はこれまで……」と泣く泣く父に別れを告げ、七十歳の祖母を先頭に十一歳の兄、八歳の私、二歳の妹、そして十一カ月の弟は祖母の背中に、住み慣れた赤れんが造りの社宅をあとに、後ろ髪を引かれる思いで歩き始めました。

駅へ続く大通りは大混乱、すると突然大きな男が現われ、小さなリュックサックを背負つて健気にも歩く妹を抱き上げ、すたすたと歩き去ろうとしています。「人さらい？」と一瞬母は思ったそうです。妹は人見知りか激しく、特に現地人を見ただけでも泣き出すのに、抱き上げられたので、火のついたように泣きわめきました。母の背中には大きな荷物、両手にも荷物は追いかけることもままならず、引き揚げる時に娘をさらわれたとなつたら、父に何と言つて詫びたらよい

のだらうかなどと考えながら急ぎ足で追いかけたそうです。その青年が十メートルくらいの間隔をずっと保ちながら歩いていることに気がつき、心を落ち着けてよく見ると、その現地人は、父が日ごろよく面倒を見ていた青年であることに気がきました。青年は先に駅に着いて待つていて、私たちが到着すると、笑顔を見せて足早に妹をおいて、立ち去りました。

駅前には、日本に持ち帰ろうとしたあらゆる大小の荷物が積み上げられていましたが、身の回りの物を持つだけで列車は超満員です。捨て去られる運命が待つばかりでした。張家口駅に着いた私たちは駅長室に入り、母は「主人が日本に帰らないで残ると言つて社宅にいます。私たち家族も一緒に残ります」と意を決して訴えました。駅長も助役さんも「日本人は全員帰るのです」「いいえ、ここに残ります！」と必死に言う母に、「ご主人も後からきつと帰ります。北京か天津で必ず会えますよ」との説得に、私たちも沢々列車に乗ることになりましたが、駄駄をこねていた間に、どの列車も既にほとんど引揚者で満員、乗る余裕がありません。

せん。何本もの貨物列車の下をリュックサックを背負ったままかくぐり、やっとすいていた無蓋貨車を見つけた。でも石炭を満載しています。広軌の鉄道の車両は高く、石炭を積んだその上に登るのは大変でしたが、兵隊さんや駅員さんに尻押ししてもらいやつとこさ皆で貨車に上がりました。背中の曲がりかけた祖母が弟を背負い、どうやって上がったのか今考えると分かりませんが、ともかく全員が乗りました。

列車が動き出せば転げ落ちそうで、不安定の上もありません。そのとき、父が以前世話したことのある部下だった方が「あつちにすいた列車がありますよ！」と教えてくれたのです。再び高い貨車から降り、列車の下を何本もくぐりぬけ、やっと一番端の引込線に止まっている列車にたどり着きました。そこには二、三人で満員になる小さな狭い車掌車を何両もつないだ列車が止まっており、たった一両だけがすいていたのです。我が家六人と父の同僚のもう一大家族が乗り込みましたが、超満員です。だれかの足が自分の足の上に乗る、思わず悲鳴がでました。更に小さな窓には匪賊

の襲撃に備え、弾よけの米か豆の入ったカマスが立てかけられていて車内をますます暗くしていました。風も思うようには入りません。でも何が辛いするか分かりません。張家口を出発してすぐに雨が降ってきました。しかも大陸性気候は夏でも夜は気温がぐっと下がります。狭い暗い車内でも屋根があることで、どれほど救われたことか計り知れませんが、無蓋車に乗った方は雨に打たれ風邪を引き、それがもとで亡くなった方も決して少なくありません。

「列車は間もなく発車の気配です。「社宅を守る、財産を守る！」と言って残った父はどうなっているのか気になります。探すことすらできない大混雑です。社宅で別れたのが永の別れだったのかと……。しかし、出発が遅れていたこの列車もいよいよ出発時刻が近付きました。いきなりガタンと列車が動き出したその時、黒い塊が二つ私たちの車両に飛び込んできました。危い！とだれかが叫びましたが、無事に乗車。顔を見て皆ビックリ！父ともう一人の社宅に残った同僚の方でした。十何本もの引込線にずらりと並んでいる数十両

の列車、列車、列車の中、順次発車していく列車を探し回り、最後に近い列車に飛び乗ったそこに家族が乗っているとは……。

父が語るには、皆を見送った後、日本軍（駐蒙軍）の兵隊さんが一軒一軒家をのぞき、「日本人は残っていないか、日本人は一人も張家口には残らないぞ！早く張家口駅に行け！」と声を掛けて回ってくださったのだそうです。半分諦めかけていた母は、あふれる涙で、どれほど駐蒙軍の方に感謝したことがわかりません。

狭い列車の中はいよいよ混み合い、足の置場がありません。列車は発車してはすぐに停車、動いては止まり、止まっては動きしてなかなか進みません。一本のレールの上を何本もの引揚げ列車を走らせているのですから、進まないのも道理です。遠くで銃声が聞こえます。思わず首をすくめ頭を低くします。「窓から顔を出すな！弾に当たるぞ」大人のどなる声が頭上から落ちてきます。やがて銃声も遠のきますが、沿線警備の日本軍が蹴散らしてくれたのでしよう。列車は再

び止まります。止まっている間に大・小用を済ませますが、列車はいつ発車するか分からず、用の途中なのに列車が動き始めズボンを引き上げながら動き出した列車を追いかけ飛び乗ったり、とにかく用便には苦勞があり、列車で待つ家族もヒヤヒヤしどおでした。動きだした列車はまた停車。匪賊に線路を爆破され機関車が横転、蒸気を吹き上げながら横たわる機関車のすぐ横をこわごわ徐行した列車は、またすぐ止まり、掩蔽壕えんぺいごうの中でその日は泊まりです。

夜、遠くからでも分かる石炭ガラを落とすときの赤い火が襲撃目標となるため、ところどころ線路の両側に土塀を造り遮蔽してあるのです。翌朝また出発。相変わらず列車はなかなか進まず、普通七〜八時間で北京に到着するのに、四日ほど要し、やっと天津に着きました。

途中、どこかわからないが、駅では沿線警備の日本軍の兵隊さんが、乾パンをどっさり運びこんでくださり、妹の小さなリュックサックの中にぎゅうぎゅう詰めにしていたのが、この長い脱出行の命の綱と

なり、私たちの命をつないでくれたのです。

私たちは小さい車両で窮屈だの、足が重なり痛いの、暗いなど文句を言ったりしていましたが、一方では、一日中真つ暗闇か、足元の石炭がゴロゴロして不安定な上に張家口駅出発直後の雨でずぶ濡れになり、着替えもないまま、夜の冷気で体が冷えこみ風邪を引き、悪くすれば肺炎を起こし、死に至るという二重苦、三重苦に責められている方々がいたので。

天津では「淡路国民学校」に収容されました。広い教室にアンペラを敷き、その上にも布を一枚さらに敷き、これが居間兼寝室となりました。隣人との境はリュックサックや鞆、荷物が仕切りとなり、幼い弟はハイハイしながらこれを取り越え、他人様の座敷？に入り込み「オーイ、この子はどこの家の子か」と、度々抱き上げられて帰宅？しまいいには「ハイ、お宅の豆タンクを返しますよ」と人気者になるほどの元氣の良い赤ん坊で、弟はここで一歳の誕生日を迎えました。食事時は、大人や大きい子供が配給を受けに階下まで受け取りに行くことになっておりましたが、たまに

代わりに行くと、御飯の入ったばけつや味噌汁の入った鍋など、重いだけではなく持ち難いことはなほはだし、汁などちよっぴりこぼしたりしようものなら、ひどく怒られたものでした。こぼした分だけ配分量が減るのですから必死に運びました。

大勢の人が、一時に収容されたものですから、便所は直に廊下にあふれだし、臭いが漂い非衛生この上もない状態となり、応急に皆で校庭に長い溝を掘り、両側に板囲いをして上からも見えないように屋根を張り、簡易便所を急造しました。また薄いアンペラや毛布の下は鉄筋コンクリートのため、この上での生活は体を冷やす結果となり、帰国後オネシヨ癖が付き随分困りました。

ある日、銃、刀類を差しだすようにとの触れが回り、軍属の父は立派な赤革鞆の付いた軍刀を領事館に返納に行きました。

「オーイ、日本へ帰れるぞ！」と喜色満面の父が家に飛び込んできたのです。「どうしたの？」といぶかる私たちに父の話はこうでした。

軍刀を返したあと、人だかりのしている部屋を何だろうと思つてのぞいて見たら、そこでは帰国手続をしている真つ最中。尋ねてみると病弱者、乳児、高齢者などを抱えている家族から優先的に乗船できる既定があり、今その方たちの手続が終わったところで、まだ少し余裕があると係官は教えてくれた。早速その場で手続を取り、ほとんど最後に近い方で受け付けてくれたのだよ」とのこと。「街中で子供たちの担任の川崎正明。吉岡春夫先生にも出会ったよ」と言うではありませんか。先生方も手続のためにお出掛けだったのだろうか、それとも買物にでもお出掛けだったのだろうか、などとひとしきり話は弾みました。

引揚げ第一船に乗船する人たちは、別の収容所へ移ることになりました。うろ覚えですが陸軍貨物廠だったと思います。ここでしばらく待機した後、いよいよ乗船の日、列車で港まで移動しましたが、デッキには今まで見たこともない青い日の兵隊（鉄兜からして英国兵？）が銃剣を手に持ち、仁王立ちになって監視しています。その兵隊は私たち子供に向かって「おいで

おいで」をして菓子を与えようとするのですが、銃の先にキラリと光る剣が怖くて近寄れず、グズグズしていたら、兵隊の方から私たちの方に歩み寄りお菓子をくれました。鬼畜米英が身につき怖くて体が動きませんでした。

塘沽港には、私たちの乗船する中国からの帰国第一船「江ノ島丸」が停泊していました。乗船時には厳しい持ち物チェックがあり、刃物類は裁縫バサミまで取り上げられました。

ともかくこうして何とか乗船できました。この船は貨物船のため、カイコ棚のような子供でも頭がつかえる低い床が急造され、大勢が乗れるように改造してありました。ゴツンまたゴツンと何度も頭を床にぶつきましたが泣き笑いです。何と言ったって日本に帰ることができるので、我慢できました。

父の七年間にわたる夢半ばにして、後から追いかけた私たちが第二の故郷とも思い、慣れ親しんだ五年間の思い出の大陸を離れたこの日は、昭和二十年十月二十二日でした。

終戦直後とあって海上には浮遊機雷が数えきれないほど流れていて、船は昼間航行し、夜は投錨して潮に流される航法をとり、危険がいっぱいの海上を機雷を避けながら航海は続きました。

出港して何日目かに暴風雨が襲ってきました。横に寝ればゴロゴロ転がり、縦に寝てもズズッと頭の方にずれたり足の方にずれたりします。気分が悪くなり、急いで甲板に上がってみて驚きました。手すりにつかまっていると手の届きそうな目の前に海が迫り、かと思うと今度は空が目の前に広がるといふ物凄い揺れで、船が前後左右にもまれ、一瞬転覆するのではないかと思いました。

普段なら二泊三日のところを一週間も要し、十月二十七日、やっと日本が見えてきた時には、デッキは鈴なりの人、人、人であふれ喚声を上げました。福岡県の博多港に着いたのです。でも検疫のためでしょうか、上陸は二十八日でした。遠隔地に帰郷する方たちから順番に列車に乗ることになり、近くの方は最後になります。父の実家の東京とは連絡がとれず、私たちは止

むなく島根県江津市近くの大叔母（父の叔母）の家に、
これまた連絡の付かぬまま頼ることになりましたが、
島根は近いので、乗車順位は最後の方になりました。

博多港から次第に人が減っていきませんが、私たちの
乗車順はまだ先の方です。朝から待つて夜になつ
てもまだ乗れないのです。そろそろ寒い時期に差し掛
かつて夜は冷えてきます。日中は博多の方々に炊き出
しの世話になり、空腹は凌ぐことができましたが、夜
の冷え込みはどうしようもありません。そんなとき、
非情？な声が聞こえてきました。「博多港まで列車は
こない。隣の新博多駅には列車があるのでそこまで歩
いてください」と言う。「エッ、そんな馬鹿な！」と
皆、つぶやいていましたが、そんなことを言ってみて
も始まらず、真つ暗な夜道を重いリュックサックや荷
物をまた担ぎ上げ、大勢の群衆の中を迷い子になつて
はいけないと、親は子供の名前を呼び続けながら歩き
ました。「すみお！けんじ！」「ハイイ」また、しばら
くすると「けんじ、すみお、いるのか」これを繰り返
しながら、やっと新博多駅に到着しました。今夜は、

無蓋貨車でした、真つ暗闇の深夜、疾走する貨車の上
はひどく寒く、もらった毛布一枚を身に巻きつけても
震えが止まらず、体を抱えるようにして寒さを凌ぐ、
関門トンネルをくぐる時には、首筋に落ちてきた水滴
の冷たさに驚かされたりしました。

江津駅では、朝から夕方まで三江北線の列車を待ち、
やっと夕方に乗車した列車は超満員です。私たちは荷
物ごと窓から車内に入り、父はデッキに立ちん棒。発
車して間もなく、父のそばにいた女性が遠慮勝ちに
「俊ちゃんじゃないのかい」と、声を掛けてきたので
す。ハツとして振り向いた父の目に連絡の取れなかつ
た大叔母の姿が飛びこんできました。大叔母は「長い
こと会ってないし、疲れたような、すすけた顔をして
いる。この人は中国に行っていた俊三さんかもしれな
い」と思い切つて声をかけたのだそうです。連絡もな
しにお邪魔することを詫びる父に、「いいからいつま
でもおりなさいよ」と温かく慰めてくださったのです。
大叔母は久しぶりに沼津まで買い物に行き列車本数の
少ないこの時期、同じ駅前で随分待ちこの列車に、し

かも同じ車両に乗り合わせたのでした。

江の川の自然に接し、気を取り直したころ、やっと東京の伯父（父の兄）と連絡が取れ、品川区東中延の伯父の家が焼夷弾を受けたものの、素早く消し止め無事だったことも判明。大叔母宅に一週間お世話になった後、十一月初めにやっと東京の土を踏みしめることができました。

狭い四畳半に親子七人が転がり込み、頭と足を互い違いにして何とか寝る生活が始まりました。隣の八畳間には、四男の叔父（父は三男）が親子三人で楽々暮らしているのも子供心には不思議に思えました。

このころ、父は引揚げどきのあの大奮闘、リュックサックの上に毛布を二枚積上げ、両手には昔の大型の革製の鞆を二つ持つという、体力の限界をほとんど超える頑張りに、帰国後は体がいうことを効かなくなり、一年間ふらふら状態が続いていました。

このような時に、国鉄が海外からの引揚げOBをどんどん受け入れていたのにもかかわらず国鉄には戻らず、叔父（父の弟、五男）の経営する小さな工務店に

名ばかりの役員として就職したのです。これが貧乏の始まりで、経営が不調の時には給料は遅配、あつてもまず、他人から先に支給し身内は後回しで、しかも分配、ひどい時にはずっと無給で我慢したときもありました。が、ここから母の大活躍が始まりました。昔とった杵柄きねづかの和裁の腕を活かし一日中、針（縫物のため）を持ち続け、時には、徹夜で仕立てる姿を垣間見たりしたことが幾度となくありました。頑張り過ぎから、時、体調を崩し病になりました。頑張り過ぎましたが、食べ盛りの子供四人を思う母の気力は病魔をも払いのけ、しばらくしてまたもとの元気を取り戻し、事無きを得たこともありました。仕事の無いときには、昔なじみを訪ねたり、仕事をとるために、あちこち歩き回り、空しく帰って来たときの母の顔には疲れがにじみでておりました。そうかと思うと、突然見知らぬ方から注文をいただき、いぶかしがっていると、「立てが上手で早いと人から聞いたので……」という腕の評判を聞きつけてこられたことが分かり、またまた元気が湧いてきたり母は、一喜一憂しておりました。

そんな折に、家族が顔を合わせると決まって口を置いてでてくる愚痴は、「あんなに急な引揚げ命令さえなければ、もつとたくさんいい物を持ち帰ることができたのに惜しいことをした」と何不自由のなかつた大陸での生活が思い起こされ、目の前の貧乏暮らしがたまらなくつらく思えました。

昭和二十四年四月、私が明日から六年生という日、少しゆとりがでた叔父が建ててくれた六本木の新居に引っ越しました。狭い四畳半からやつと開放され、普通の家でも大きな家と感じました。しかし浮き沈みの激しい工務店はその十年後には、この家も手放さなくてはなりませんでした。このころには私たちも成長し、生活のために高校卒業と同時に実社会に飛び出し、やがて良き伴侶を得てそれぞれ独立し、張家口時代のことなどを懐かしく思い出すこのごろです。

【執筆者の横顔】

畑野憲次氏は、昭和十二年、水戸線笠間駅構内の鉄道省の官舎で生まれた。

憲次氏の父は昭和十三年、単身支那に渡り、華北交通に働き場所を得て、生活も安定した二年後家族を連れにきて、豊鎮に移住、一家揃っての生活が始まった。やがて父の転勤で北京に移り、妹が生まれた。そのあとすぐに張家口に転勤となり、憲次氏と兄は、張家口第二国民学校に通うことになった。昭和十九年弟が生まれ、前年、孫の顔見たさにやってきた祖母と合わせて、七人の所帯となった。

戦争中だというのに張家口はのどかで、畑野家は、裕福な日々を過ごしていた。

が、八月十五日を境に、張家口は一変した。日本人は全員帰国ということになり、張家口駅に集まることになった八月二十日、父が、これまで築いてきた財産を守るといって、頑としてきかないので、母は泣く泣く父と別れを告げ、弟をおぶった祖母を先頭に、三人の子供を連れて大きな荷物を背に、両手にも荷物を持つて駅まで歩いた。出発時刻が近づき、ガタンと列車が動き出した途端、飛び乗ってきた人を見て驚いた、父だったのである。もう二度と会うこともないだろう

とあきらめていた母は、嬉し涙にくれた。

塘沽港より船に乗り、昭和二十年十月二十二日、大陸を離れた。十月二十七日、日本が見えてきたとき、デッキは鈴なりの人、人、人であふれ、喚声をあげて博多港に上陸。島根県の江津の大叔母のところで一週間世話になり、東京の叔父を頼って上京。狭い四畳半に親子七人が転がりこんだのである。

父は叔父の経営する工務店に役員として就職、母は昔取った杵柄きねづかの和裁の腕を活かし家族を支えてくれた。引揚げ後の苦労はあつても、どこまでも素直で孝心の信念厚い、畑野氏は一家団らんの融和のシンボルである。

(社引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

内蒙古・宣化で迎えた終戦

大阪府 末光 時枝

(旧姓 岡部)

昭和二十年十月二十八日の夜明け「オーイ、博多やぞー、博多が見えたぞー」と、父のどなる声が甲板への出入口から聞こえると、母や周りの人、船底の横に棚をこしらえた上に寝ていた人たちも起き上がり、ぞろぞろと梯子段を上りだした。

天津外港の塘沽港を十月二十六日に出航した「江ノ島丸」は、途中で嵐に遭い、ほとんどの人が栄養失調に加えて船酔いでぐったりしていた。母は避難途中に生まれて二カ月の弟をかかえて梯子段を上り、私もその後が続いた。甲板は既に人がいっぱい、朝もやに近づく山影を静かに見すえていた。

二年前、三十五歳の母と五歳の私が、蒙疆といわれていた内蒙古の宣化県城外東土関外（現在中国河北省